

VI 聽 覺 事 業



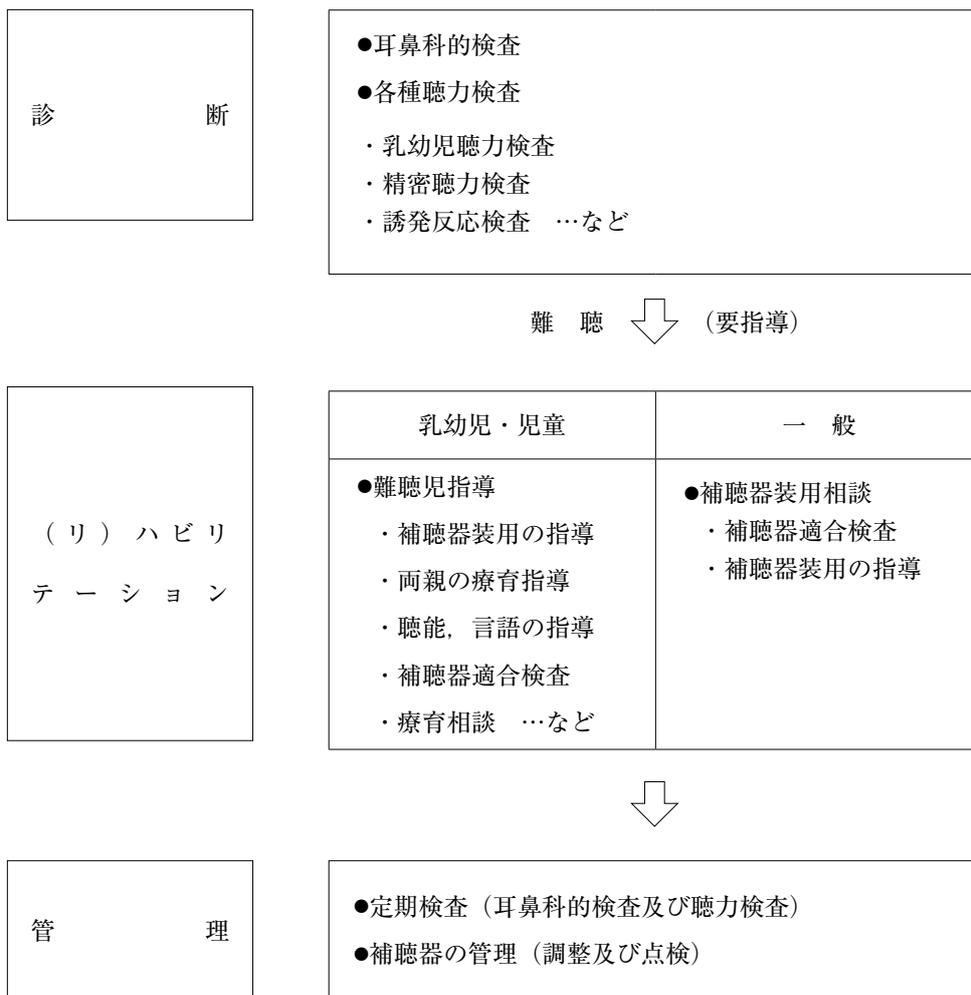
VI 聴覚事業

茨城県からの委託を受け、「聴覚障害児の早期発見・早期指導」を主目的として、乳幼児・児童を中心に相談に対応した。耳鼻科的検査、各種聴力検査による診断を行い、難聴児・者に対しては、補聴器装用や聴能言語の指導を行った。

また、原則として耳鼻科専門医からの紹介がある場合は、一般も対応した。

1 概要

(1) 業務の内容



(2) 実 績

受診者数は延べ2,665人、稼働日数は229日であった。また、実受診者数は763人であり、その内訳は、初来の受診者が134人、昨年度以前からの継続受診者が629人であった。

業務内容別にまとめると下表のとおりである。

① 業務内容別の実績 (延べ人数)

(人)

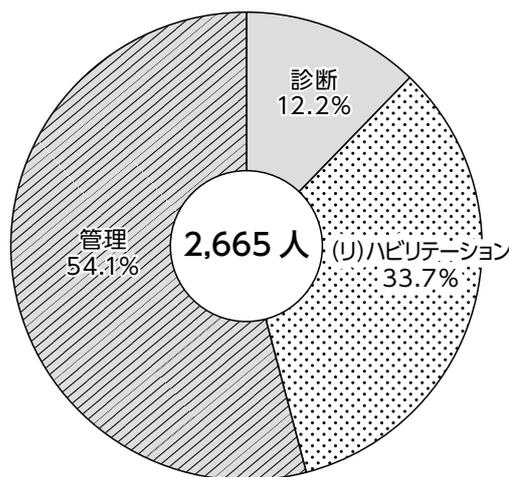
区 分	乳幼児・児童	一 般	計	比率(%)
診 断	313	12	325	12.2
(リ)ハビリテーション	710	189	899	33.7
管 理	1,024	417	1,441	54.1
計	2,047	618	2,665	100.0

区分：「乳幼児」・・・6歳未満（就学前）

「児 童」・・・6歳以上（就学後）満17歳以下

「一 般」・・・満18歳以上

② 業務内容別の分布



(3) 受診者の居住分布

県内受診者は、水戸市が最も多かった。また、その近郊市町村を中心に県北地域、鹿行地域など広域に分布していた。

県外からは、7人の受診があった。

① 県内受診者の分布 (実人数)

市町村名	人数(人)	市町村名	人数(人)	市町村名	人数(人)	市町村名	人数(人)	市町村名	人数(人)
水 戸 市	210	常陸大宮市	22	石 岡 市	9	大 子 町	3	古 河 市	1
ひたちなか市	124	小 美 玉 市	21	桜 川 市	9	下 妻 市	3	八 千 代 町	1
日 立 市	57	東 海 村	18	潮 来 市	8	かすみがうら市	3	土 浦 市	1
笠 間 市	41	鹿 嶋 市	14	行 方 市	8	龍ヶ崎市	3		
那 珂 市	34	高 萩 市	13	神 栖 市	8	阿 見 町	3		
鉦 田 市	33	大 洗 町	12	つ く ば 市	6	牛 久 市	2		
茨 城 町	33	城 里 町	11	筑 西 市	5	守 谷 市	2	県 外	7
常陸太田市	23	北 茨 城 市	10	取 手 市	4	坂 東 市	1	計	763

2 業務別の様態

(1) 診断の部 (実人数)

① 年齢・性別

乳幼児・児童は、新生児聴覚スクリーニングの影響により、0歳が最も多かった。

性別で見ると、乳幼児・児童では女児よりも男児が多く、一般では男女で差はみられなかった。

ア 乳幼児・児童内訳

(人)

年齢(歳) 性別	0	1	2	3	4	5	6	6~12	13~17	計
男	21	5	6	20	6	5	6	11	1	81
女	20	1	1	5	4	3	2	10		46
計	41	6	7	25	10	8	8	21	1	127
比率(%)	32.3	4.7	5.5	19.7	7.9	6.3	6.3	16.5	0.8	100.0

※ 年齢区分の「6歳」は就学前の幼児、「6~12歳」の6歳は就学後の児童。

イ 一般内訳

(人)

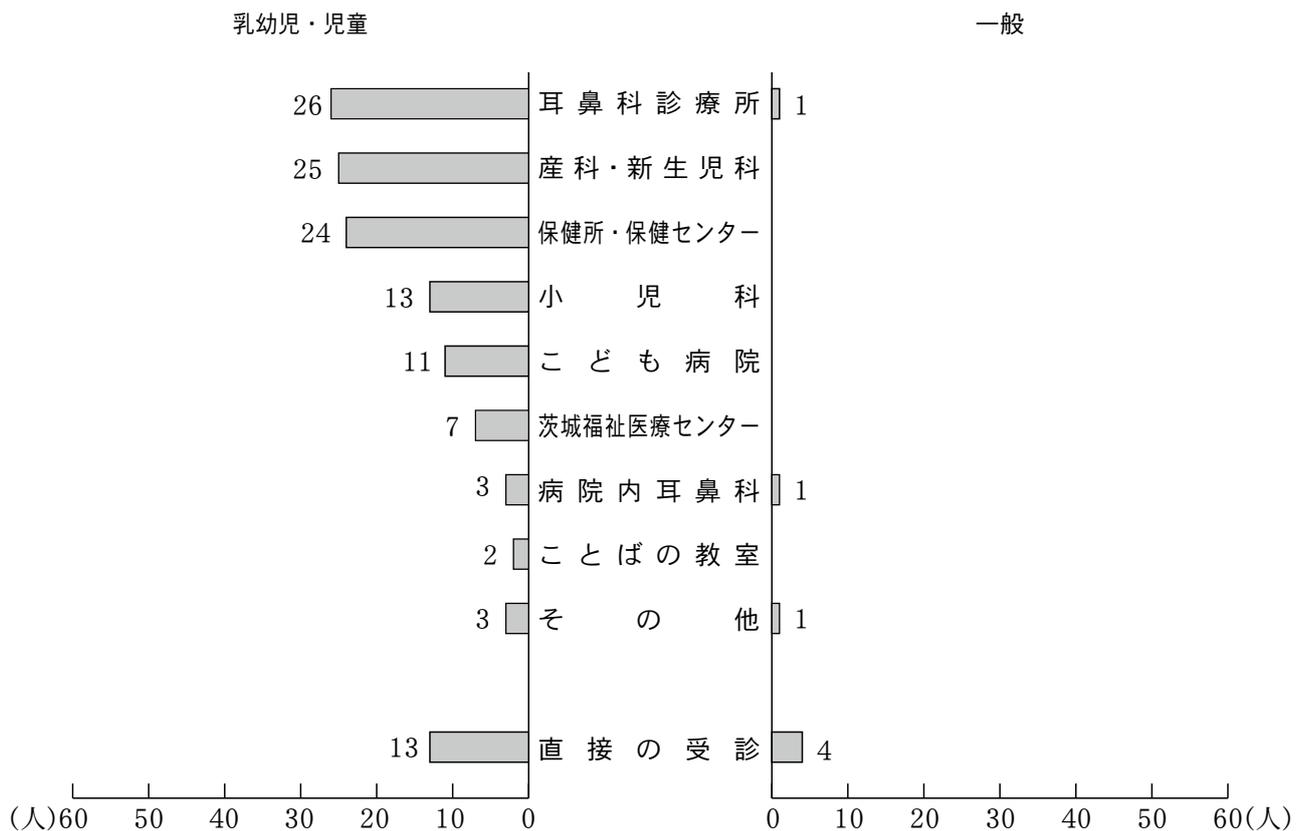
年齢(歳) 性別	18~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~	計
男							3		3
女			1		1		1	1	4
計	0	0	1	0	1	0	4	1	7
比率(%)	0.0	0.0	14.3	0.0	14.3	0.0	57.1	14.3	100.0

② 受診経路

他機関からの紹介による受診が多く、紹介元は、耳鼻科や産科・新生児科、保健所・保健センターが多かった。

耳鼻科からは、一般の耳鼻科では難しい、乳幼児の聴力検査や（リ）ハビリテーションなどの依頼、産科・新生児科からは、新生児聴覚スクリーニング検査後の精密検査の依頼であった。また、保健所・保健センターからは、乳幼児健診やことば遅れ、聞こえの様子などについての相談から難聴が疑われ、紹介となっていた。

ア 受診経路内訳



③ 受診起因

乳幼児・児童では、新生児聴覚スクリーニング検査を契機に受診した例や、ことば遅れや聞こえの悪さを疑われ、難聴の有無を調べるために受診した例が多かった。

ア 受診起因別内訳

乳幼児・児童

起 因	人数(人)
新生児聴覚スクリーニング	29
ことば遅れ	28
難聴の疑い	28
3歳児健診	9
難聴リスク	9
学校健診	8
就学时健診	6
治療中・後	2
1歳6ヶ月健診	2
補聴器相談希望	1
幼稚園健診	1
耳鳴り	1
その他	3
計	127

一 般

起 因	人数(人)
補聴器相談希望	5
難聴の疑い	1
その他	1
計	7

④ 検査結果

難聴の有無をみると、乳幼児・児童では、両耳とも正常である例は74人で、約70%を占めており、難聴がある場合は片耳と両耳でほぼ同数であった。また、難聴の種別は、乳幼児・児童と一般いずれも感音性難聴が多かった。

ア 聴力検査結果

年齢(歳) \ 区分		正常(人)	難聴あり		難聴の種別		
			両耳(人)	片耳(人)	伝音性(耳)	感音性(耳)	混合性(耳)
乳幼児・児童	0	10	6	9	3	18	
	1	4	1			2	
	2	5	1			2	
	3	22	2		2	2	
	4	8	1	1	1	2	
	5	8					
	6	5	1	1	2	1	
	6~12	12	4	5	2	11	
	13~17		1			2	
	計	74	17	16	10	40	0
比率(%)	69.2	15.9	15.0	20.0	80.0	0.0	
一般	18~19						
	20~29						
	30~39	1					
	40~49						
	50~59		1			2	
	60~69						
	70~79		4			8	
	80~		1			2	
	計	1	6	0	0	12	0
	比率(%)	14.3	85.7	0.0	0.0	100.0	0.0
合計	75	23	16	10	52	0	
比率(%)	65.8	20.2	14.0	16.1	83.9	0.0	

※1 検査結果の出ていない者が、20例いる。

※2 年齢区分の「6歳」は就学前の幼児、「6~12歳」の6歳は就学後の児童を示す。

⑤ 診 断 名

乳幼児・児童では、難聴の疑いが72人と最も多く、難聴以外の診断名では言語発達遅滞が24人と最も多かった。

ア 診断名別集計

(人)

診 断 名	乳幼児・児童	一般	計	診 断 名	乳幼児・児童	一般	計
難聴の疑い	72		72	言語発達遅滞	24		24
両側感音難聴	15	6	21	構音障害	5		5
片側感音難聴	13		13	ダウン症候群	3		3
両側伝音難聴	1		1	18トリソミー	1	1	2
片側伝音難聴	2		2	WEST症候群	1		1
耳管狭窄症	1		1	Williams症候群	1		1
耳垢栓塞	3		3				
外耳炎		1	1				
耳介奇形	1		1				
機能的難聴の疑い	1		1				
小耳症・外耳道閉鎖症	3		3	計	147	8	155

※ 症例により複数の診断名を持つため、計は受診者数とは異なる。

⑥ 診断後の措置

乳幼児・児童では、終了となる例が72人と最も多く、次いで聴力管理のための定期検査指示となる例が多かった。

また、10人に対して(リ)ハビリテーションを開始した。

ア 診断後の措置内訳

乳 幼 児 ・ 児 童

措 置	人数(人)
終 了	72
定期検査指示	16
(リ)ハビリテーション開始	10
経過観察	7
治療(依頼)	3
中止	1
継続中	18
計	127

一 般

措 置	人数(人)
(リ)ハビリテーション開始	5
治療(依頼)	1
終 了	1
計	7

(2) (リ)ハビリテーションの部

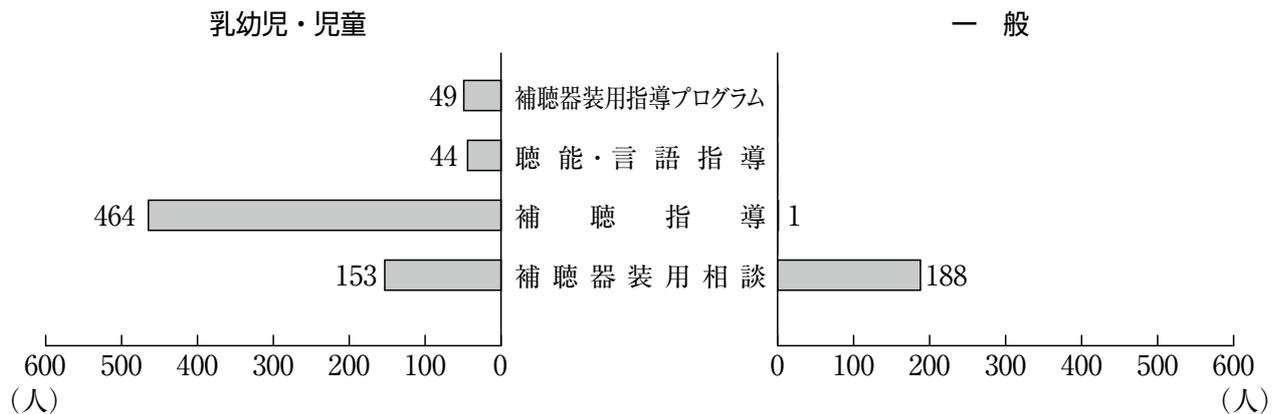
① (リ)ハビリテーションの業務内容

年齢や難聴の程度などにより、概ね下表の内容に分けられる。

ア 業務の内容

補聴器装用指導：難聴児の養育に関する保護者への教育を中心とした指導プログラム（難聴診断後に、全4回実施）
聴能・言語指導：言語発達を中心とした発達全般に関する評価及び指導（年齢や難聴の程度で異なり、数年間継続）
補聴指導：主に、乳幼児に対する補聴器の適合及び装用指導（聴力検査や補聴器調整を繰り返し行い、数年間継続）
補聴器装用相談：児童・成人に対する補聴器の適合及び装用指導（1～2か月で終了）

② 業務内容別(延べ人数)



③ 年齢・性別（実人数）

乳幼児・児童では、就学前である0～6歳を合計すると71人であり、次いで小学生である6～12歳が43人と多かった。性別で見ると、女兒の53人に比べて男児が80人と多かった。

一般では、男性の17人に比べて女性が27人と多かった。

ア 乳幼児・児童内訳

(人)

年齢(歳) 性別	0	1	2	3	4	5	6	6～12	13～17	計
男	7	8	6	7	7	8	3	22	12	80
女	5	5	3	4	3	4	1	21	7	53
計	12	13	9	11	10	12	4	43	19	133
比率(%)	9.0	9.8	6.8	8.3	7.5	9.0	3.0	32.3	14.3	100.0

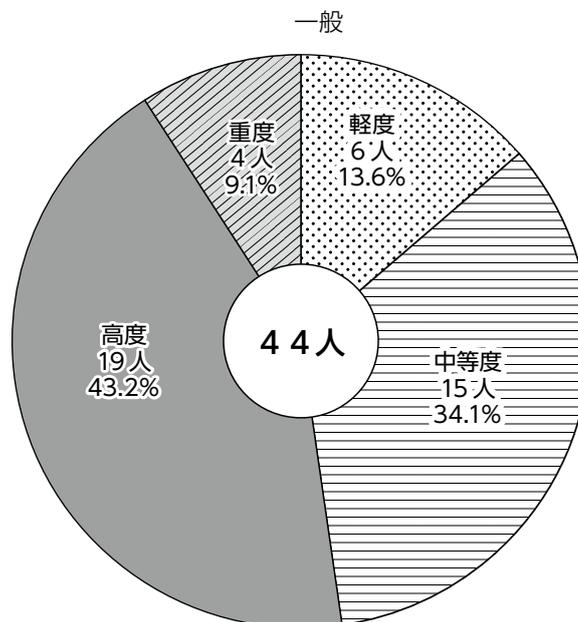
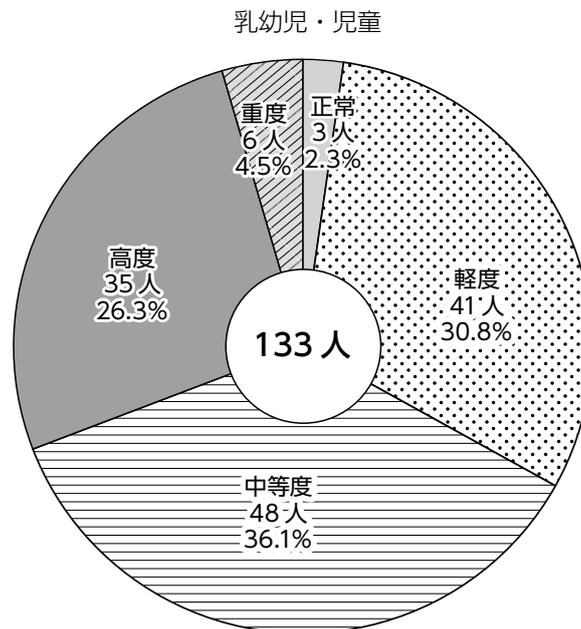
イ 一般内訳

(人)

年齢(歳) 性別	18～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～	計
男	1	3	4	1	1	1	4	2	17
女	2	10	1	4	2	1	5	2	27
計	3	13	5	5	3	2	9	4	44
比率(%)	6.8	29.5	11.4	11.4	6.8	4.5	20.5	9.1	100.0

④ 良聴耳の聴力レベル分布 (実人数)

乳幼児・児童は、軽度難聴、中等度難聴、高度難聴が多く、一般は、中等度難聴と高度難聴が多かった。



※正常範囲～19dB, 軽度20～49dB, 中等度50～69dB, 高度70～99dB, 重度100dB～

(3) 管理の部

① 管理の業務内容

業務内容は、定期的な聴力管理と補聴器管理に分けられる。

補聴器管理は、補聴器の作動不良などに対処したもので、聴力検査等は実施していない。

ア 管理の延べ数 (人)

区 分	聴力管理	補聴器管理	計
乳幼児・児童	977	47	1,024
一 般	383	34	417

② 年齢・性別（補聴器管理を除いた実人数）

乳幼児・児童では、小学生である6～12歳が178人と最も多かった。就学前である0～6歳は合計すると162人であり、6～12歳に次いで多かった。

一般では、男性、女性ともに20～29歳が最も多かった。

性別で見ると、乳幼児・児童は男児、一般は女性の方が多かった。

ア 乳幼児・児童内訳 (人)

年齢(歳) 性別	0	1	2	3	4	5	6	6～12	13～17	計
男	12	20	19	18	14	10	6	94	55	248
女	5	16	8	11	9	10	4	84	37	184
計	17	36	27	29	23	20	10	178	92	432
比率(%)	3.9	8.3	6.3	6.7	5.3	4.6	2.3	41.2	21.3	100.0

イ 一般内訳 (人)

年齢(歳) 性別	18～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～	計
男	11	26	13	5	4	3	11	12	85
女	17	40	15	13	6	6	12	15	124
計	28	66	28	18	10	9	23	27	209
比率(%)	13.4	31.6	13.4	8.6	4.8	4.3	11.0	12.9	100.0

③ 診断名（補聴器管理を除いた実人数）

乳幼児・児童，一般とも両側感音難聴が最も多く，次いで片側感音難聴が多かった。

難聴以外の診断名ではダウン症候群が最も多いが，その他にも様々な症候群を診断名に持つ例の受診があった。

ア 診断名別集計

(人)

診断名	乳幼児・児童	一般	計	診断名	乳幼児・児童	一般	計
難聴の疑い	43	1	44	ダウン症候群	43	7	50
両側感音難聴	214	174	388	先天性CMV症候群	4		4
片側感音難聴	96	14	110	ピエールロバン症候群	4		4
両側混合性難聴	16	7	23	コルネリア・デ・ランゲ症候群	1		1
片側混合性難聴	3	2	5	BO (R) 症候群	1	1	2
両側伝音難聴	29	11	40	チャージ症候群	2	1	3
片側伝音難聴	37	4	41	染色体異常		1	1
機能性難聴（含：疑い）	1		1	18トリソミー	2		2
滲出性中耳炎	15		15	22q11.2欠失症候群	1		1
外耳炎	2	1	3	ヌーナン症候群		1	1
耳垢栓塞	4	1	5	ペンドレット症候群	1		1
小耳症・外耳道閉鎖症	8	3	11	ゴールデンハー症候群	1	1	2
耳介奇形		2	2	アルポート症候群	1		1
外耳道狭窄	1		1	ワールデンブルグ症候群		1	1
耳小骨連鎖異常疑い		1	1	カブキメーキャップ症候群	1		1
前庭水管拡大症	6	4	10	奇形症候群	1		1
人工内耳例	13	3	16	先天性風疹症候群		2	2
口唇・口蓋裂（含：術後）	6		6	先天性ミオパチーセントラルコア症候群	1		1
口蓋裂	3		3	網膜芽細胞腫	3		3
軟口蓋裂	2		2	原発性脳腫瘍	1		1
顔面神経麻痺	1		1	ファンコニ貧血	1		1
言語発達遅滞	8		8	呼吸不全	1		1
構音障害	2		2				
発達障害	12	7	19				
自閉症スペクトラム障害	1		1				
脳性麻痺	7	3	10				
片麻痺		1	1				
軟骨無形成症	1	1	2	計	601	255	856

※症例により複数の診断名を持つため，計は受診者数と異なる。

④ 措置（補聴器管理を除いた延べ人数）

乳幼児・児童，一般とも継続管理となる例が最も多かった。そのほか，聴力や環境の変化などから（リ）ハビリテーション開始となる例もあった。

ア 管理後の措置内訳

乳幼児・児童

措 置	人数(人)
継続管理	838
診断書発行	47
他医紹介	33
終了	25
（リ）ハビリテーション開始	24
治療（依頼）	8
経過観察	1
療育依頼	1
計	977

一 般

措 置	人数(人)
継続管理	306
（リ）ハビリテーション開始	27
診断書発行	25
他医紹介	14
終了	6
治療（依頼）	4
経過観察	1
計	383